

公開シンポジウム

寺と町の運命共同体 —成田山門前町のゆくえ—

鈴木 正崇（慶應義塾大学）

成田山門前町（千葉県成田市）は江戸時代中期以降、「成田不動」で名高い新勝寺（新義真言宗智山派）への参詣者で賑わいをみせ、江の島や相模大山などと共に江戸近郊の社寺参詣地として、講集団に支えられ、明治以降も繁栄を継続してきた。本発表では信仰と観光を二本柱に、地域活性化に挑戦し続けてきた成田山門前町を取り上げて検討する。

成田山門前町は本町・仲町・上町・幸町・花崎町・田町・東町の七ヶ町からなる（人口 4023 人、成田市の 3%、2016 年 5 月 31 日現在）。成田国際空港に近接し、町並みと寺院に惹かれて訪れる外国人観光客も多い。JR と京成の駅前から 800 m に及ぶ長い参道には飲食店や土産物屋が立ち並び、「国際観光都市」を表看板にする成田市の発信拠点である。成田山は初詣で有名で、東京近郊では明治神宮に次ぎ、川崎大師と共に毎年二位争いの常連で、正月三ヶ日には約 300 万人の人出がある。正月の多忙さは 2 月の節分まで続く。豆まきには歌舞伎俳優、大河ドラマ出演者、大相撲の力士など有名人が登場して賑わう。新勝寺は 2015 年に『ミシュラン・グリーンガイド・ジャポン』（改訂第 4 版）で二つ星の評価を受け、2016 年には門前町が「日本遺産」の「北総四都市江戸紀行・江戸を感じる北総の町並み」に認定され、伝統文化を活用した外国人の呼び込みに拍車を掛けようとしている。

新勝寺は護摩供養を主体とし、開運招福、厄除け、交通安全などの祈願で知られる。御守では身代おんまもり御守みがわりと呼ばれる災難よけや、全ての事に打ち勝つ勝御守かちおんまもりが名高い。元禄 16 年（1703）の江戸深川での出開帳以来、歌舞伎の市川團十郎との縁が深く、花崎町では役者絵を表参道の装飾に活用して「歌舞伎ロード」として売り出して工夫を凝らす。能も毎年 5 月に梅若の「薪能」が光明堂前で演じられる。門前町は多彩な行事・芸能・イベントで繁栄を維持してきたが、不動講の多くは担い手が高齢化して衰退し、旅館はほぼ消滅して、土産物屋と飲食店の競争が激化している。観光客は 1980 年がピークで 1995 年以降は大幅に減少し、現在では全盛期の約 3 分の 1 以下になって、地域活性化は緊急の課題である。

成田山門前町の特徴は、新勝寺の参拜月の正五しょうごく九月に参詣者や観光客が多いことで、特に正月は参道が人で溢れる。地域活性化としては、閑散期にイベントを入れ、年中行事のリズムを組み替える試みがなされてきた。太鼓祭（4 月）や祇園祭（7 月）を観光化に活用し、弦祭り（10 月）など秋の企画も入れて、年間切れ目なくイベントが継続するようにした。7 月 8 日は、参道を名物の鰻の形状に因んでウナギロードに見立ててウナギ祭りを開催する。参道を主客参加の場として「劇場化」する試みが続く。成田山門前町は神・仏・人・財・物が連関し、正五九月、一年の四季、7 年周期の祭当番町（祇園祭・女人講）、10 年ごとの新勝寺の「開基イベント」という 4 種の生活時間が輻輳する。成田山門前町を「寺と町の運命共同体」と名付け、流動化する現状を通して未来への展望を試みる。